みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

ブルネイのネパール人「グルカ兵」(変わるネパールと変わらぬネパール：グローバル化した世界に暮らす, 第3回)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 南, 真木人 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5119

グルカ兵の待遇改善を求める「グルカ退役兵協会」西部事務所（2002年）

変わるネパールと変わらぬネパール

グローバル化した世界に暮らす

第3回

国立民族学博物館助教授
写真・文 南 真木人

みなみ・まきと　1961年、札幌生まれ。筑波大学大学院修了。専門は文化人類学、南アジア研究。主要共著／『エスノ・サイエンス』（京大出版会　2002年）、『文化の生産』（ドメス出版　1999年）、『アジア読本ネパール』（河出書房新社　1997年）など。

年末休みを利用してブルネイに行ってきた。ブルネイは石油を産出する裕福な国として知られる、ボルネオ島北岸のイスラーム王国である。ネパールの連載で、なぜブルネイが登場するのか。

実はここには、ネパール人兵士約二千人とその家族が住んでいるのだ。彼らの名は「グルカ兵」。ブルネイ・スルタン国王軍の傭兵である。その歴史は、一九六二年、英領マラヤの英国軍グルカ連隊がブルネイで起きた反乱を制圧し、前国王を保護したことにはじまる。それ以来、ブルネイ王室は英国軍の退役グルカ兵を再雇用し、厚遇してきたのだ。

グルカ兵とは、一八一六年のアングロ・ネパール戦争以降、英国が植民地インドを統治するのに雇い入れてきたネパール人兵士のことだ。ネパールは、ゴルカという町を起点にネパール全土を統一したゴルカ王朝が支配するが、その兵士がグ（ゴ）ルカ兵と呼ばれた。勇敢で忠誠心が厚いことから彼らは重用され、第二次大戦には約二十五万人が英国軍として参戦し、ビルマやインパールで日本軍とも戦った。インドの独立後、連隊はインド軍（現在約十万人）と英国軍（現在約三千人）に分割されたが、英国軍グルカ連隊は今日もなお国際平和維持部隊などで世界中の紛争地域に派遣されている。ニュースにはならないが、おそらくイラクにも駐留していることだろう。

今、日本では自衛隊のイラク派遣を前に、この戦争の大義は何であったかが問われている。他方で、ネパールは過去二世紀にわたって、大義どころか、食べていくために若者を英国軍に送り続けてきた。英国では一九九九年、ユーゴスラビアのコソボで不発弾の処理中に事故死したグルカ兵の補償金が、英兵のそれよりも格段に低いことが人種差別だと問題化した。二〇〇二年には、第二次大戦で日本軍の捕虜になった、ネパールに住む八十歳代の元グルカ兵が、英兵と同額の補償金を求める訴訟をおこし、英国高等法院は政府に対してその支払いを命じる判決を下した。戦後補償は敗戦国にとどまらず、戦勝国においても始まったのだ。

ブルネイのネパール人「グルカ兵」

ブルネイの博物館と王立ギャラリーで警備のグルカ兵とネパール語で会話した私は、あらためて、激動の二十世紀のあらゆる前線でネパール人の若者が命を賭けて戦っていたという「歴史の裏側」を、複雑な気持ちで振り返った。